

人生辭典

新山 武彦

| | | |
|-------------|----|-----|
| 前書き | 5 | ページ |
| 第一部 「メッセージ」 | | |
| 生について | 10 | |
| 物事について | 12 | |
| 自殺について | 13 | |
| 魂の開放について | 14 | |
| 失敗について | 16 | |
| 痛みについて | 18 | |
| 人生について | 19 | |
| 指針について | 20 | |
| 第二部 「考察」 | | |
| 進化について | 22 | |
| 見下しについて | 23 | |
| 必要なものについて | 24 | |
| 忘れ物について | 25 | |
| 迷いについて | 26 | |
| 持ち物について | 27 | |
| 働きことについて | 28 | |
| 疑問について | 32 | |
| 社会について | 33 | |
| 仕組みについて | 36 | |
| 方法について | 37 | |
| 人生について | 38 | |
| 哲学的姿勢について | 39 | |
| 指針について | 40 | |
| 日常について | 21 | |
| 考えるについて | 22 | |
| 一人について | 23 | |
| 性について | 24 | |
| 執着について | 25 | |
| 好きなものについて | 26 | |
| 道について | 27 | |
| 敵について | 31 | |
| 人について | 32 | |
| 性について | 33 | |
| 執着について | 34 | |
| 好きなものについて | 35 | |
| 道について | 36 | |
| 敵について | 37 | |
| 人について | 38 | |
| 性について | 39 | |
| 執着について | 40 | |

| | | | |
|---------------|----|----|-----|
| 見るについて | 42 | 42 | ページ |
| 同じについて | | 43 | |
| 違和感について | 44 | 44 | |
| もし、について | 45 | 45 | |
| 第三部 「鍊金術によせて」 | | | |
| 次は、について | 48 | | |
| 風について | 49 | | |
| 可能性について | 50 | | |
| 自己について | 51 | | |
| 明日について | 52 | | |
| 構成要素について | 53 | 53 | |
| バランスについて | 58 | | |
| 物質的なものについて | 59 | | |
| 社会とは何かについて | 60 | | |
| 忍耐について | 61 | | |
| 溶かすについて | 62 | | |
| | 63 | | |
| フ拉斯コについて | | 54 | |
| 揮発性について | | 55 | |
| 二つについて | | 55 | |
| 矛盾について | | 56 | |
| 優れているについて | | 57 | |
| あとがき | | 58 | |
| 補足 | | 59 | |
| | 73 | 64 | |

前書き

この「人生辞典」は、私の人生の体験を通して得られたインスピレーションや気づき、学びを書き記したものとなっている。

構成としては、三部構成となっている。

第一部は、何年も前になるが、ある体験により真っ白になった時、そこで感じたインスピレーションを記したものとなっている。

第一部に記したそれぞれの言葉については、一語一句変えるつもりのないものであり、私自身にとつては、絶対に疑わないものとなっている。

第二部は、その後の学び及び、日常における体験を通しての気づき、そして、私なりの考察を記したものとなっている。

私自身は哲学が好きなのだが、常にそれは、実践的であり続けなければならないと思っている。まだ、未熟な部分は見受けられるとは思うが、共感して頂ける部分もあるのではないかと思う。一目通して頂ければ幸いである。

第三部は鍊金術的觀点から、色々と書かせて頂いている。

ここに来て、なぜ鍊金術なのかということになるが、それは好きだからである。ただ、なぜ好きなのかと言わると、なぜかは分かりませんと言うだろう。

だが、はつきりとした理由は述べることはできないが、好きということには変わりはなく、ずっと学び続けている次第である。

さて、それでは鍊金術というと皆様が何を思い浮かべるかは想像に難くはないのだが、本当の鍊金術、言うなれば、その本当の意味を知っている方はいらっしゃらないのではないかと思われる。かく言う私自身もはつきりと言えないのであるが、ここ最近になつて、何となくそれが分かりかけた次第である。

気になる方はどうぞ自身で調べて頂きと思う。それでこそ意味があるものとなるのが鍊金術なのだから。少しでもその橋掛かりとなれば、私としては満足である。

以上、前書きを述べてまいりましたが、ぜひ、中身の方を読んで頂いて、何か感じて頂ければと思う。

なお、巻末には補足として、本文に対するフォローを書かせて頂いている。それは、私自身の気持ちだつたり、また本の構成上、本文の方には記さなかつたものなどを載せている。お粗末なものではあるが、理解の助けになればと思う。

以上

第一 部

メッセージ

一、生について

全てを含むのは「死」ではなく「生」である。
在るのは事実だけ。よつて地獄が生じるのは
この世である。